

報



會

會 岳 山 本 日

58

月 六 年 一 十 和 昭

登山と機密保護

世界は今、擧げて嵐の前の武装的平和時代だ。歐洲にも、東亞にも、一觸即發の危機がゴロ／＼轉がり、國際時局は息詰るやうな緊迫を示してゐる。この非常時局の裏に躍る各國諜報機關の活躍と防衛とは、就中東洋の盟主たる我が國に於て、クライマツクスに達してゐるときへ傳へられて居り、我々も又さう云つた國際神經の鋭敏な動きを、察知するに足る諸現象を、屢々見聞してゐる處だ。この現下の國際時局と、スパイ取締りと云ふが如き事柄は、一見山登りとは無縁の如くであるけれども事實は然らず、登山もまた非常時の荒濤の洗禮を、免れることが出来ない。

陸地測量部發行、千島列島、大島等の地圖が、機密保護の見地から發賣を禁止されてゐることは周知の事實であるが、その他、最近に於てはその目的が奈邊にあるにせよ地圖を買ふ外國人が、と角注目追窮を受くるのが現在の事實であり、この適用が取締の強化と共に、漸次登山者の上に及ぶものでないとは、決して斷言出来ないと思はれる。スパイ取締りの徹底を圖る、總動員機密保護法案は、第六十九特別議會に於て審議未了に歸したけれども、この法案の精神は、そのまゝ實際に運用せざるを得ない實情にあることを思ふ時

山登りも亦この法律案の末端に觸れるものであることを、遺憾乍ら肯定しない譯にはいかぬ。

皆既日食觀測のために、外人部隊の多くが北海道斜里を中心として二分間の狙撃陣を布いたことは今更敢て説明を要しないと思ふ。これ等の外人部隊が、當初は斜里岳の頂上に觀測本據を設ける豫定だと聞いてゐたが、登山を許可されたのは仁科博士の宇宙線調査班丈で、外人部隊は遂に一步も山に登ることは許されなかつた。外人部隊が斜里岳に登りたいと云ふ理由は、同地は海岸よりも山岳地帯に於て天候よく、雲霧が山腹以下を埋めても、山頂に居れば蒼穹の眞只中に、黒い太陽の秘密を探り得る可能性がある事に依るのだが、この希望は達せられなかつた。我々は、遙々歐米から、皆既日食觀測に遠征し來つた學者に對し、これをスパイ視する程狭量ではないが、前年の南洋ロソツプ島に於ける日食觀測に、某國から派遣され來つた觀測隊員中、スパイと斷定してもほゞ間違ひのない奇怪な外人の混入してゐた事實から推して、帝國の北方の生命線であるオホツツク海と、千島方面を容易に窺知し得る斜里岳に學者とはいへ外國人の登攀を喜ばない、當局の苦衷は一應察せられるものがある。

某觀測隊の一首腦者が、この嚴重な監視を潜つて、一回に亘り、密かに斜里岳に登つたことから、地方警察の警部補と巡查部長とが各一名登山口に張り込み、更に憲兵さへも出動するに至つた。

そしてその後に至つて、新聞通信の特派員に限り斜里岳登山（目的は仁科班訪問）が、一回許可されることゝなつたのである。

斜里岳登山禁止は、登山そのものを目的としない内外人學者並にジャーナリストに課せられた事實であるが、禁止の理由が機密保護にある以上、問題は今後に引續くものであることは明白だ。斜里岳が不可ならば、知床半島の山々、利尻島等も當然その適用範圍に含められる。千島の山々も又同様と見るべきである。

更にこれ等北邊地帯に限らず、内地及び植民地の山岳にも、ある程度の制肘が加へられるに至るなきは元より保し難い。たとへ審議未了に終つたと云へ、來議會に再提出されること疑ひなき、機密保護法案の内容を、登山家も又一應検討する要があるのは之があるが故である。

同法案中、最も注意を要すべきは寫眞撮影に關する制限で、これは單に從來禁止されてゐた要塞地帯等に限らず、高層建築、工場、海岸、山岳等が當局の認定の下に指定されるのである。しかも赤外線寫眞の發達は、雲表の高處から驚くべき遠距離を明瞭に撮影し得るので、この點に

關しては、登山者自身が慎重戒しなと、不測の禍ひを蒙ることがあるかも知れない。元より登山者の中に、諜報を目的とするやうな不心得者が、介在することを信ずる程筆者も迂愚ではないのだが、取締りの峻嚴は時に意表な事態を惹起する虞れが充分にあることを先づ考慮に入れないでゐるまい。若し登山者そのものの中から、取締りの觸手を受くことがあれば、これが一つの動機となつて、山岳並に山岳人が無用の窮屈さを蒙るに至らう。

ソヴェート政府が、クルチャフスカ登攀を目的とする我が山岳界一部の壯舉に對し、斷じてカムチャツカへの入領を肯じなかつたことは著名な事實である。これも亦國際情勢の然らしむるところで、我が官憲が紅毛天文學者の、斜里岳登攀を許可しない事實と對比して、濫りにその個狭さを一方的に責める譯にはいかぬけれども、かゝる情勢が國際的にも延燒して、報復的な登山閉鎖が行はれるやうな事態を招致するが如きこととあらば、海外へのエキスベディションに伸張して行きつゝある、我が山岳界の打撃は蓋し甚大である。

我々は現下情勢のかくの如きであることを悲しむと共に、十方無碍であるべき管の山々を、機密保護の適用外の安全圏内に置いたために、最善の努力を傾注することが、あらゆる登山家に與へられた一つの責務であらうと痛感する。（細井吉造）

佛國のヒマラヤ遠征隊

各國登山界のヒマラヤ遠征熱に刺戟されてといふ譯ではあるまいが、今年フランスからもヒマラヤ遠征隊が送り出された。フランス山岳界にとつては最初のヒマラヤ遠征だけに昨一九三五年十一月には、國家的計畫として政府も援助する旨を閣議の席上で決議したほどの力を入れやうである。

遠征準備委員會の發表に據れば此計畫は數年來の懸案であつて、昨年中に決行する豫定であつたが、昨一九三五年は他國の遠征隊に先を越されて、外交的折衝による入國許可が得られず、今年に持越したものだといふ。尤も資金の集まり加減が思ふやうに行かなかつたことも遠征を遅らせた一因となつてゐやう。

さて遠征隊の目的とする山は一體何山か、これは何人にとつても興味のある問題だが、委員會はかう言つてゐる。

「吾々は何も八千米といふ數字に囚はれてゐる譯ではない。少しヒマラヤを識つて人間ならば七千七百メートル至七千八百メートル、登攀の困難さからいつても一流に屬する山の存在してゐることは知つてゐる筈だ。けれども十四座を數へる八千米級が今日まで一つとしてその山頂を明渡してゐないのを想ふと、さう易々と

八千米級を諦めることも出来ない。

さて八千米級の第一位、エヴェレストだが、これは英國が既に四回も遠征隊を送り、現に今年も送つてゐるし、過去に於て英國の遠征隊は頂上へ高距三百メートルといふ地點まで漕ぎ付けてゐるばかりでなく、有爲の登山家をその山懷に失つてゐるのだ。

大體、歐洲のアルプスなどと違つて、ヒマラヤでは、或る登山隊が或る一つの山に對して大きな犠牲を拂ひ、殆んど頂上に近い結果を挙げた場合、その山は、以後その登山隊の屬する國のために Reserve されるといふ不文律が存在してゐる。

この意味から言つても、エヴェレストは佛國ヒマラヤ遠征隊の目的とは成り得ない。また從來英國登山隊の幾回も辿つた登路を忠實に攀ぢて最後の三百メートルだけを見得んがために、大掛りな遠征隊を送るのも、どうかと思はれる。

カンチエンジャンガ(八六〇三米)はダーザリンから比較的近いが、いづれの側面も非常な困難を豫想せられ、はじめてヒマラヤに遠征隊を送る佛蘭西が、これを目指すことは無鐵砲であらう。マカル(八四七〇米)は委員會に於て問題となり、西藏、支那兩國政府からの許可さへも得たのであるが、寫眞に據る觀察の結果、その登路は憚怖をたのむに非ざれば不可能なる如きものがあるで、遠征の目的から除外された。エヴェレストの南峯 Lhose (八五〇

〇米)は地形もまだ不明瞭であるばかりであく、より容易なエヴェレストに近接するこの山を選ぶにも當るまい。これもエ峯に近づく Cho-Oyu (八一五五米)は今日までに知られてゐる一側面が比較的容易な登路を暗示してゐるものゝ、雪崩の危険は甚大と想像される。ネパール・ヒマラヤの他の巨峯 (Gosainthan, Pic anoyne XXX, Morshadi, Daulaghi) は殆んどその様子が不明で、遠征の目的にならない。

ナンガ・パルバット(八一五五米)は八千米級では平原から最も近付き易いものゝ一つであるし、その登路も異常な困難はないかと思はれる。然しこの山は、今日では獨逸の遠征隊にリザーヴされたものと言ふべきである。

かうしてみると、残るはカラコラム・ヒマラヤである。八千米を越す四峯の内 Dhaulagiri (八五九一米) と Garshabru (八〇三三米) の二峯はその登攀殆んど不可能と思はれるのを除外し、残る Broad Peak (八二七〇米)、Hidden Peak (八〇六八米) の二峯の内、後者の南東山稜が非常に長い、しかし比較的容易に思はれる、登路を暗示してゐるのを見つけたのである。一九三四年デイレントの國際登山隊はこの山稜をその末端である Conway Saddle から取付かうと計畫したのであるが、全長十三キロメートルもある山稜を、いくつかの大きな突起を越

しつゝ登つてゆくのは、過重な労働である。佛國の遠征隊はこの山稜に直接取付いて頂上への捷徑を探索すればよいと思ふ。(La Montagne, 1936, p. 67 寫眞参照)

然し目的の山は、現地へ行つた上で、遠征隊長の選擇に一任する積りである。」

右の如く、目的の山頂は本年二月頃迄は未定であつたが、三月末隊員出發の頃には大體 Hidden Peak と決定し、最近の入電に據れば、五月下旬にはバルトロ河水にベース・キャンプを張つて愈登攀に取掛る模様である。

しつゝ登つてゆくのは、過重な労働である。佛國の遠征隊はこの山稜に直接取付いて頂上への捷徑を探索すればよいと思ふ。(La Montagne, 1936, p. 67 寫眞参照)

然し目的の山は、現地へ行つた上で、遠征隊長の選擇に一任する積りである。」

山岳圖書展覽會目錄別冊

定價 並製 五十錢 (送料)
上製 壹圓 (四錢)

「山岳」合本用表紙

- 一、上質バックラム(灰青色)
- 二、背、山岳第何年西曆を押す。
- 三、ピラは兩面に會章を押す。
- 四、前後見返し茨木畫伯筆。
- 五、一年分合本用表紙のみを所要の場合、五十錢(送料本會負擔)
- 六、雜誌を本會へ送付される場合製本料共一回(返送料本會負擔)

「會報」綴込用表紙

- 一、ピラは濃綠色レザール、會章押捺
 - 二、背は濃紺色クロース。
 - 三、代金四十錢(送料本會負擔)
- 御入用の方は振替又は小爲替にて御申越下さい。

「會報」合本

- 一、一號より五十號までの合本表紙出來。
 - 二、體裁會報綴込用表紙に準ず。
 - 三、代金一圓(製本料、送料共)
- 振替口座東京四八二九番

◆會員通信◆

ヒマヤラ隊出發

綠蔭可愛の候となりました。

益々御清祥の趣謹で御慶び申上げます、私共の今次の計劃につき豫て一方ならぬ御芳情を賜り深く感銘致して居ります、それにつき準備の狀態其他を時々御報告申上げるつもりに致して居りました所思ひの外用事が多く意を果し得なかつたのは残念に思つて居ります、しかし其後各方面の御好意によつて具體的知識を取集め更に案を練りまして別紙の如き實行案を作製しこれを基礎として行動することに定めました故早速御報告申上げます、なほ出發に先立ち一同をして御挨拶に上がらせるべきでありますが先發の離京時日も迫つて居りますし用事も益々たてこんで参りますので甚だ不本意ではあります、が拜顔の機を持ち得ないとも限りませぬ、或はこれが御暇乞の御挨拶になるかも知れませぬ故右様の節には何卒悪からず御海容のほど幾重にも御願ひ申上げます、右御禮の心を籠めつゝ御報告かたはらの御挨拶何卒御うけ下さいますやう御願ひ申上げます。

昭和十一年六月十九日

立教大學學友會山岳部長

辻 莊 一

旅次日程

隊員 堀川 彌一

山縣 一雄

湯淺 巖

濱野 正男

六月二十一日 先發山縣離京

二十四日 右神戸出帆(大阪商船ひまらや丸)

七月 十日 殘三名離京

十二日 右神戸出帆(大阪商船「いづ丸」)

八月 十八日 先發カルカッタ諸各種準備の爲滞在

九月 七日 殘三名カルカッタ諸

十一日 一同カルカッタ發

十三日 右發徒歩旅行

三十日 ベースキャンプ豫定

九月末迄ナンダゴット其他踏査の豫定

十月 十日 キヤムプ引拂復路に就く

十五日 アルモラ又はナイニ

十八日 ボンベイ諸

二十五日 カルカッタ諸

十月末又は十一月初カルカッタ出帆

十一月下旬 歸京

白馬より小川温泉へ

五月一日 四谷——樽池

同日 樽池——彌兵衛澤——蓮華温泉

同日 蓮華温泉(七)——白高地澤——朝日岳國境(三)——朝日岳(三)——イブリス山(天幕泊五)

同日 一三日 イブリス山(八三)——北又谷獵師小屋(三三)——越道峠(三三)——小川温泉(五三)

これは春おそくまでスキイの使へる手頃なコースであるから随分人が通つてゐることかと思つたが、その割に通つてゐない様だ。此度は北又谷を黒部の方へ入るつもりで食料などが多く荷が少し重くなつたが(従つて度々休んで行つたので右の時間は普通よりもずつと多くかつてゐると思ふ)。此處だけならば荷も少なくて済み樂であらう。北又谷の橋は無かつたがカゴ渡があつたので助つた。(泊へ行くバスの中で替林署の人がこのカゴ渡をもつと丈夫なものにし又指導標など作りたいと言つてゐた)そこから黒部の方へ入る河筋はどうなつてゐるか少し不安なので考へてゐる矢先、大きな雪を立て、雪と石と土の塊がつかみ合ふやうな形で落下して來て川の中へ水煙を立てたので、あつさり「止めた」といふ事になつた。それで小川温泉で一度汗を流してブナクラ谷入つて毛勝山へ行く事にして、泊からスキイは送りかへし、あとは全部アイゼンを使つた。

五月一日 ゴロメキ(五三)——ブナクラの頭(天幕泊三三)——

同日 一七日 八時天幕を出て猶又山の手前まで行つて見たが雨になつたので引かへし、天幕をたたんで降りる(三三)——ゴロメキ(二〇)

同日 一八日 歸へるつもりだったが又、大變良い天氣になつたので辨當を持つて早月尾根(九三)米の上まで遊びに行つて翌日歸京(細野、丸山與兵衛、靜男兩君同行)。(田邊主計)

九州便り

△阿蘇・鷲ヶ峰

九州の至高至上の岩の殿堂阿蘇高岳北尾根の盟主「鷲ヶ峰」の北壁・北西壁は昨秋迄處女コースとして九州岳人の等しく初登攀争ひの的となつてゐたが

北西壁(小工・中根パーテイ) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

北壁(八幡・松田 同) 十年

る若氣の登高欲を抑制し、常にトレーニングを忘れてはならない。そしてこの清静火の山の一角に遺難碑の建つことを、もつとも恥辱とせなければならぬ。

阿蘇の御神火は燃えつづける、そして又、赤がし谷に松ヶ尾谷に凄惨な音して鷲よりの落石は何時止むとも知れず落ち續けてゐる。

△山岳會創立

八幡製鐵所山岳會

八幡市日本製鐵株式會社總務部

勞務課内

△三六年「山日記」脱漏の分

若松軍部山岳部 若松市本町

九州齒科醫專山岳部 福岡市今泉

門鐵小倉工場山岳部 小倉市金田

岳人スキークラブ 八幡市黒崎(安西方)

九軌運輸山岳部 小倉市砂津

肥前山岳會 佐賀市吳服町(大坪方)

△福岡縣體育協會ハイキング獎勵

一般大衆體育向上は透徹せるハイキングより他に術なしと爲し、先に縣内主要山岳會代表より成る、ハイキングコース調査委員なるものを制定し、之が第一歩として左記の委員に實路に寄る縣内優秀コース一〇九を撰定(縣外二〇コース)右ハイキング指導パンフレット千部を近く刊行、各學校・體育團體・男女青年團主要工場鐵山團體へ配布することになった。綱葉、竹内亮氏。

福岡地方(竹内亮、山田光雄委員)

久留米地方(磯部幸一委員)

大牟田地方（北嶺峻委員）
北九州五市地方（藤崎定夫、長澤信治、月原俊二委員）
筑豊地方（米田幸良委員）

右書發刊後は縣體協主體となり縣下各山岳會、ハイキング團體を綜合爲し統制あるハイキング團體を設け所期の目的に向つて進み徹底せる體育向上に縣下舉げて、獨逸に於けるワンダーフォーゲル運動と伍して行かうと大變な意氣込である。（六月十五日、月原生）

穂高小屋焼失報告

六月十八日東大山岳部渡邊兵力外千名（部員外）並に案内者中政政太郎（蒲田）早朝ホタカ小屋より奥穂高を経てジャンダルムに往復し、午後四時半頃小屋に歸着せるにホタカ小屋飛驒側一棟焼失せるを發見す。當日快晴、微風飛驒側より吹く。本年降雪量多く、小屋は二棟共八分通り埋没して居た。小屋内は冬、春季の如く濕氣相當激しく、又可成混雜して居た。當日朝起床五時、炊事の爲鐵製コンロ（薪炭使用）を使用し、奥一階の寢室には炬燵を入れた。出發八時過ぎ迄には、中畝が常の通り火の仕末をして出かけた。小屋發火並に燃焼中不在なる爲、今の所では出火の原因判明せず。當時小屋内には冬季使用の爲各學校山岳部の食糧燃料の殘品相當に在り、その中石油、ガソリン、アルコール等が在りし爲火力は相當強かりしもの如し。

同日午後五時上高地に向ひ下山、翌日蒲田に行き、所有者今田重太郎等と會し、経過報告、後仕末に就き相談す。同小屋は本年秋に改築の豫定なるため、その材料を使用して七月十日頃迄に假建築を爲して、シーズン迄に間に合はす事にする。（六月二十五日）（渡邊記）

◆◆山の便り◆◆

◎外人のために一ノ俣小屋改造

一ノ俣小屋では上高地帝國ホテル燕山莊と聯絡し外人の登山者にも不自由を與へないやうに部屋の一部を改造ベツトも數臺設備することになった。

◎夏山を控へて山小屋登山路の開闢

夏山のシーズンを目前に控へて東京警林局では次の通り山小屋、登山路の新設改造を行つた。

◆北アルプス方面

イ、德澤小屋は舊牧場をそのまま、正式に山小屋として經營、收容人員は百三十人、
ロ、大瀧小屋は從來定員五十名であつたのを増築し九十八名となつた。

ハ、白骨温泉に旅館一軒新築、ニ、有明驛より玉垂又は黒川兩方面に自動車が開通中房温泉への距離が短縮された。

◎戸隠山方面

戸隠山五地蔵岳小屋が改造された
ハケ岳方面
本澤温泉の新築成り五百人を收容し得る。

◎秩父方面

イ、將監峠より白石山、大洞林道間の山道が新設された。
ロ、十文字峠から甲武信岳への道路新設、

◎東北朝日岳方面

米坂線小國驛より山尻無澤五味驛に至る登山路新設

◎奥日光方面

イ、湯元より八丁湯への登山路改造
ロ、加仁湯温泉の新設

◎穂高小屋直ちに再建築に着手

焼失した穂高小屋は縦走の要路にあつて居り必要缺くべからざる位置にあるためその復舊は七月十日頃までに間に合はすことになった、目下所轄大阪警林局の許可を申請中であるがこの許可が下り次第直ちに假建築にとりかかり所有者今田重太郎氏はその準備を急いでゐる、今秋にはこの假建築を改造して冬季シーズンの使用に耐へる様再建築を行ふ事になった、これで一時アルピニストをがっかりさせた穂高小屋も新築されて再びお目見得する事になり登山者は一安心といふところである。

◎立山、黒部の山便り

一、白馬、上高地は一日から、立山剣は七月五日から山開きするが富山警林署では五色ヶ原、立山室道、劍澤、眞砂澤、彌陀ヶ原追分の五ヶ所をキヤムプ指定地となしこれ以外にキヤムプするときには嚴罰に處す。

三、金澤醫大、東京帝大醫學部、昭和醫事等はキヤムプ地で七月廿日から八月中旬迄高山病理學の研究の傍ら登山者の無料診察をなす
三、黒部川天嶮に架する吊橋は殆んど墜落してゐるので日本電力會社では警林署と協力して七月早々開設する。

四、廿日立山ブナ坂の原始林の藤橋下四キロの舊道と六キロの新道を改修し角度を緩め道幅擴張工事が竣工した

五、小川温泉の山崎村元湯から白馬の新スキーコース廿三キロに廿米乃至百米毎に立木を立て赤線でコースを印する工作が廿日竣工した、これは長野、新潟、富山を繋ぐ最短路である

六、彌陀ヶ原弘法茶屋に女の團體のための女子専用便所や炊事場約三坪新築方廿日許可された。

◎阿頼度富士登攀成功

アライト富士登攀の關西學聯一行五氏は積雪期に於ける初登攀に成功去る六月四日根室に歸着した。一行

は五月十四日根室發十八日幌延着同日硫黃山中腹迄登り十九日阿頼度着、二十日二班に分れ登路偵察、積雪状態良好であつたので南浦から直接東岳へ向ふことに定め途中迄荷物を運ぶ、二十一日標高千五百米附近にキヤンプIを設け二十二日更に吹雪を冒してキヤンプIIを設置二十三日午前四時キヤンプIIを出發午前八時二十五分頂上を極め直ちにキヤンプIIに下り、第二班は午前八時十分キヤンプIを出發午後五時二十分頂上着午後七時キヤンプIIに歸着、天候に恵まれて遙にカムチャツカ半島を望見し得、二十六日離島。阿頼度富士には永河はないことを確めた。入江君は語る。

五月二十三日阿頼度の頂上を征服しました第一班の登つた時は非常な吹雪で豫期以上の大難行でした、高度計一つが頼みの綱でしたから果して頂上だつたのかどうか自分では確信が持てなかつた位です、併し第二班の時は骨を削るやうな烈風だつたが幸ひ晴れた青空に恵まれ、第一班の足跡も發見し頂上を確認し得ました。吹雪と戦ひ寒空に揉まれ難行苦闘の末征服した頂上の快は言葉に盡せませぬ、遙か雲海の彼方、カムチャツカのベートル附近の山容と足下に渦まく密雲の斷層を眺めた時は會員一同手を握り合つた程です、午時前零が黎明で霧立ちこめて白夜に明ける北千島北端の阿頼度富士の晴れ空は全く珍しいものです。

新刊紹介

THE ALPINE JOURNAL.

Vol. XLVIII. No 252. MAY.

1936.

アルパイン・ジャーナル第一號は依然、廣範圍にわたる登攀記録で埋められてその實録を示して居る。その内から主なものを拾つて見ると、先づヒマラヤ方面では、例のシブトン一行のエヴェレスト偵察が巻頭を飾つて居るが、これについては既に會報誌上で詳細に紹介されたから改めて多言の要はない。唯ジョグラーフィカル・ジャーナルに發表された以外の貴重な寫眞が吾々の目を驚かす。殊に一四四頁挿入のエヴェレスト西北面の望遠寫眞など特に然りヒンドウ・クシュのティリチ・ミール第三峯(イストル・オ・ナル)二四、二七一呎の登攀が昨年ロウダア大尉、ハント中尉によつて行はれ

頂上直下二百呎近くまで登つたが疲勞のため退却して居る。ロウダアの報告によると兩氏が全然登山者としての訓練を受けて居らず、僅にスキ、狩獵等で二萬呎近く登つた位だといふから珍らしい。木暮さんの「中央亞細亞の山と人」にもこの山には非常に多くの迷信がまとはりつて居ることが書かれてあるが、一九二九年に登つた測量部の一行の中、コールドストリム大尉は狂人に殺され、バアン中尉はカシミールで雪崩

でやられたが、更に一九三五年のこの二人の中ハント中尉が登攀後二ヶ月目にチトラル河で鴨獵中溺死してしまつた。倭友ロウダア大尉はこの氣味悪い事實を報告して、チトラルに二萬呎を越へる高峯百座以上を數へるに不拘、登攀を試みるものがないのはこの迷信のためでもあると云つて居る。

R・シヨムバアクも「ルツクウ及フンザ」の題下でチトラルの紀行を書いて居る。

コーカサスでは獨逸山岳會の一九三五年遠征とW・ヘイブロッツの第二回旅行記とがいろいろ詳細にわたつて記されて居るが締切迫で讀んで居る暇がないのは残念だ。

アルプスではグラント・ジョラス北壁の初登攀が何と云つても光つて居る。一九三五年まで難攻不落を誇つたこの北壁が六月廿九日、七月二日、七月八日とたて續けに登られたその三つの記録がそれぞれ掲載されて居て、いづれも短い内に登攀の苦しさを語り、或ひは一步を先んじられた口惜しさを語つて居る。そして又これらの勝利者が頂を得て、會てはよきロープ・メイツとしてこの頂を目指しながら、この峯を目標としてしまつた仲間を追想して居るのも如何にこの登攀が激しいものであり、又登攀の熱意の程も窺はれて深い感銘を與へられる。

歐洲大陸ではポーランドとチェツコの國境を走るカルパシア山脈のダ

トラ山群へ「汽車賃十四ポンドならアルプスへ行くのとは幾何も違はない」からといふので出掛けたソマーウェル、ビーサム一行の紀行がある。その他グリーンランド、ラスムツセンランドのワトキンス山衆へのL・R・ウェイジャー以下十一名の英國西グリーランド探險隊の報告、アラスカ、ユーコン河上流地方への米國地學協會のウッド・ニューコン探險隊のマウント・スチール登攀報告等で賑つて居る。

登山史的考證としてはA・C・ロバーツのエギーユ・ド・ウ・ジェアンに於けるエミール・レイの最後に關する一文がある。

イン・メモリアム中のギド・レイ追悼の一文はアルフレッド・コルチの筆に成るもので、この大登山家の風貌を餘韻深く語つて居る。

THE HIMALAYAN JOURNAL.

RNAL.

Vol. VIII. 1936.

同誌も巻頭にシブトンのエヴェレスト偵察を掲げて居る。殆どA・Jと同じ内容のものである。ロウダア大尉のイストル・オ・ナル登攀記も然り。

サルトロ・カラコラムのピーク三十六(二五・四〇〇呎)登攀にジョン・ハント中尉の一行四名によつて企てられたが濃霧に妨げられて頂上直下六百呎で退却を餘儀なくされたガンゴトリへはJ・B・オウデンの企てがあり、コラホイへはジョン

ハントの南面からの登攀がある。オットレイ中尉は西部チトラルの旅と題してティリチ・ミール附近の峽谷紀行を書いて居る。

C・R・クツクのカブルウ北峯登攀はこのあたりから見たカンチエの偉容を寫眞を通じて想像させて呉れる。

氣象上の研究が二つ發表されて居る。カール・グーインによるナンガ・パアルバツト、一九三四年七月の氣象狀態がその一つである。三四年七月のナンガ・パアルバツトは即ち激しい悪天候でドイツの遠征隊を慘敗せしめたので、この一文はその頃の狀態を記録によつて調査したもので、ヒマラヤの氣象狀態を知るに有益であらう。

他の一つはケニス・メイゼンのネバル西部のヒマラヤに於ける降雨及び雨期についての研究である。いづれも詳しく紹介する餘裕のないのは残念である。

ウィムバー

アルプス登攀記 上

岩波文庫 浦松佐美太郎譯

(定價四十錢)

會員浦松氏の手になるウィムバーの名著の邦譯である。ウィムバーの原著は就いては今更ら説明を要しない。一八七一年の初版發行以來版を重ねること再三、後更にウィムバー自身の手になる改訂決定版も出て今日に及んでゐる。佛譯は固より獨

銜譯も夫々出て居り、全く山岳文獻中の國際的古典的地位を占めてゐるものだけに、邦譯の出現を待望すること久しいものであつた。

邦譯は決定版を基礎としたものであるが、日本の讀者から見て殆んど興味のない若干部分は省略されてゐる。それでも岩波文庫にして、三百十餘頁、星二つとしては大冊に屬する。挿畫なども、原本に收録された全部を收容されることが出來ず、己むなく、大分選擇した上に載餘してあるが、原著の密畫木版を極めて印刷するのになかなか苦心を費した跡歴然たるものがある。譯者が翻譯そのものについて一家の見地を有することは夙に知られてゐる。その邦譯についても既に定評あることだから今茲には喋々すまい。たゞ譯者の絶大な努力と精神とに敬意を表し、下巻出版の一日も早からんことを切望しておく。

◆クギーの「一登山家の生活より」やベヒトルドの「ナンガ・パアルバト登攀記」の英譯者として知られたティンダルがウィムバーの「アルプス登攀記」の新版を編集して出版すると云ふ話、ティンダルはマロリーを生んだウィンチエスターの先生、英國山岳會の中老組の一人◆曾つての本會名譽會員堀川故志賀重昂の名著「日本風景論」が岩波文庫で出る。小島島水氏編輯。

小屋焼失事件感想

總高小屋の焼失事件は我が國の登山界に種々の重大な問題を提起したそれだけに此の事件の善後がそつなく關係者何れにも納得が行くやうに解決され又我が登山界全體が之から學ぶ所あることは洵に望ましい。

終日に互る氷雪の中での奮闘の後に辿りついた小屋が焼け落ちてゐて、雪の中に焚火の跡のやうに黒く落ちこんでゐると云ふやうな場合を一寸想像すると考へた丈でも慄然たるものがある。今回は小屋の焼失による損失こそは大であつたが、兎もあれ人命に何等の損害を及ぼさなかつたことは不幸中の幸であつた。

元來山小屋の焼失した例は少い。上越上の原の鐵道省の小屋が焼けた位が恐らくは唯一の例であらうが、之は現に宿泊者が居た時に發火したもので、失火の原因も明白で問題はなく。今回の場合は小屋を使用して居た一行が山に行つた留守の出来事で、然も全焼した後で發見したものであるから、出火の原因も明でない。

別項渡邊君の手記にもあるやうに、その朝出發當時は萬事が平常通りであつた。火の如きもとろ火の程度で一行は日向水のやうな茶で我慢して出發したと云ふのである。從つ

て若し此の火が火災の抑々の原因であつたとすると。これが屋臺骨を焼く程の火となるのは何か曰くがあり相にも考へられ、冬期の使用の爲めに擔ぎ上げられてゐた石油などもあつたとのことであるから、此の石油が何かの機會に引火して取返しのつかなかつたことを惹起したものでないかとも考へられるのである。併し之とても全くの推測に過ぎない。

小屋で失策から火を起すことは決して少くはない。毛布、蒲團を焼く位の事件も往々にして有るのだが、一軒の小屋を焼き落す火と云ふものは仲々出ないと云ふのが之迄の常識であつた。とろ火位のを圍爐裡に残して山に出て之程の大事に立至つたことがなかつたのだ。殊に今度の場合の如き小屋は雪落けで半ば水浸しになつてゐて、此處で火事が起るなどは考へ及ばなかつたと云ふのだ。併しそれだけに今回の思ひがけない事件は全ての山岳人に對する誠に手厳しい警告である譯だ。

勿論一行の留守中に他の隊か小屋に入つて火を失したのだと云ふ考へ方も成り立たない譯ではない。法律問題としては此の點などは確に取上げることが出来るのだが、全然小屋から火の氣を絶つて然る後に出發すると云ふ習慣が一般に確立されて居て、火種は根こそぎ雪の中に出してしまふと云ふやうな手が盡されてゐたならば、思ひ残す所はなかつたと思ふ。尤も失火の原因や責任を今

考へた所で遅い。我々としては將來無人の小屋を後に残して出かける時には注意にも注意を重ねて凡ゆる手段を講ずると云ふ一事を肝に銘じておく他はないのだ。

總高小屋焼失事件で考へざるを得ないことは今日の山小屋が何れも冬期登山用としては甚だ不完全なことだ。何時もの事だが今回の一行も眞暗闇の小屋の中で立居に頗る不自由を感じ釘で頼に手傷を負ふたりしたと聞いた。それに小屋の中に浸込んだ雪水で、寢具が水びたしになつて居たり決して小屋の生活は爽快なものではなかつたらしい。

若し之が積雪の中に埋没してゐても兎もあれ内部がもう少し廣々として居て清潔なものであつたらば、小屋の始末をし、火を處分するのにも、遙に有利な環境にあつたらうと考へられる。勿論理窟から云へば小屋が汚いとか狭いとか云ふことが、小屋を使用する者の側の小屋の取扱態度を左右するなど云ふことは有り得べきではない。併し、實際問題として、清潔の小屋の方が清潔に保たれ易くもなり、又使ふ方から云へば清潔に使用し、始末よく使ふ甲斐があるのだ。山小屋使用上の道義的責任だが山小屋そのものの向上を圖ることは小屋主としての責任でもあり、凡ゆる點から考へて見て決して無駄なこととは考へられない。

(松方)



會務報告

五月定例理事會

五月二十八日午後六時虎の門事務所に於て開催

出席者 木暮、島山、黒田、高頭、飯塚、逸見、田口、櫻井、中屋、角田、島田、英木、松方、

一、山岳三十一年一號編輯報告(黒田) 原稿大體纏り六月勿々印刷所へ廻付の豫定

一、山日記 (一九三六) 編輯報告 (角田) 五月二十七日出来、印刷部數四、五〇〇部。寄贈の分は既に發送に着手、二十八日現在事務所宛購入申込分約一五〇部今年も七〇〇、八〇〇位、會に於て賣却する豫定

一、山岳遭難者慰靈祭參列報告(松方) 去る五月六日豊科町主催の山岳遭難者慰靈祭に當り松本在住會員河野齡藏氏に本會を代表出席方依頼せり

一、立大山人部ヒマラヤ遠征後援に

付報告あり、費用の一端に加へる意味に於いて本會より金二〇〇圓也贈呈するに決定逸見理事を通じて其旨通達を依頼。其他理事並に會員有志の間に資金充實に協力方を求めるに決定

一、風致問題(松方、中屋) 富士山ケール問題に關し鐵道、内務、兩省當局の意向報告、目下の所實現の可能性少きも適當の機會に何等かの方法を講じ山岳會としての態度を闡明にし此種策動の再發の虞なき様徹底的處置を講ずるに決定、尙事應によりては評議員會の招集を行ひ審議する事に諒解。

六月定例理事會

六月二十五日午後六時半より虎の門事務所に於て開催

出席者 小島、木暮、島田、角田、英木、飯塚、逸見、三田、黒田、島山、中屋、松方、

(委託) 榎、櫻井、田口、主要協議事項左の通り

一、「山日記」販賣狀況報告(角田) 會員に對する賣上げ六月二十一日現在七百八十九冊、梓書房に残本なく、必要に應じ市内各書店より買戻しつゝあり、賣行は頗る好成績。購買者の分布は購買者カードによる調査に従へば東京四割五分、京阪神二割、その他各地合計三割五分。

一、「會報」擴充の件(中屋) 會員

の要望により、且又、諸般の狀勢を考慮し、九月號會報から擴大する旨決定、右計畫委員として、中屋松方兩會報理事、鳥山會計理事に會員石原氏を加へた委員會組織を決定。委員會は七月理事會迄に報告の豫定

一、「山岳」三十一年第一號編輯報告(黒田)

二、風致問題(中屋)、富士山ケーブルカー問題その後の狀勢につき報告

三、立教ヒマラヤ隊後援寄附報告(松方)、六月二十五日現在、英木氏色紙に對する申込は既に遂に豫定を超過、會を通じての會員の寄附金は約參百圓の見込。尙木暮會長の名を以て英國山岳會長宛に公式書翰を以て立大隊のガール入りと通告し、直接間接に援助方を依頼した。

第七十三回小集會

昭和十一年六月四日 於三會堂

一、内蒙古の風物

江上波夫氏

我が山岳界の眼がヒマラヤへと注がれて來た今日、我々が當然とるべき「世界の屋根」へのルートとして蒙古或は青海が考へられねばならぬ。此の時機に際して一九三一年以來前後四回に亘つて内蒙古に入り専門の考古學を研究する傍ら親しくその風物に接して歸られた新進東亞考古學者東方文化研究員江上波夫氏に前記の標題の下に講演を乞ふこと

は誠に意義深きものであつた。氏は此の蒐集にかゝる貴重なる寫眞帳、地圖、其他蒙古人の使用する手袋帽、子靴下、駝駝の鈴、水樽等を示され、内蒙古の事情に就いて約一時間半に亘つて日頃の蓄蓄を傾け、來會者一同の拍手を浴びた。講演終つて同氏の撮影にかゝる十六ミリ四巻を映寫多大の感銘を收めて盛會裡に九時過ぎ散會した。(中屋記)

濱 信 酒井 忠一 山下助四郎
坂本徳太郎 磯貝藤太郎 太田 新吉
田口 一郎 神谷 恭 吉田 禮二
松島 正義 黒田 正夫 西村 雄二
中島 博美 黒田 孝雄 橋本晋七郎
高頭仁兵衛 大熊 保夫 島田 巽
磯貝 勇 茨木猪之吉 額田 敏
内田 勇三 磯野 計藏 丹羽 惠
吉田 竹志 飯塚篤之助 佐武 正一
織田 明 中屋 健次 木村 鐵吉
新庄 球生 角田 吉夫 木村 一男
飛川 維之 櫻内 敏雄 加藤 保二
林 俊介 會員外一七名

立大ヒマラヤ隊歡送會

立教大學山岳部ヒマラヤ隊の行を旺んにする目的を以て六月十九日京橋中央亭で歡送晩餐會を開いた。

出發前の諸事多端の折柄にも拘らず辻山岳部長を首めとして堀田氏以下遠征隊員諸氏の出席を得たことは非常な喜びであつたが、會員にして來り會するもの四十名に垂んとし、主催者側を代表しての三田幹事の挨拶に次いで、主賓側の辻教授の挨拶

あり、次いで小島、松方、横氏交々立つて門出を祝ふの辭を述べ、食後一同居残り、ヒマラヤの地圖を擧げて一行の行程の説明を聴いたり、全く時の移るのを忘れた形であつた當時の來會者氏名は左の通りである

(幹事石原巖)

辻 莊一 堀田 彌一 湯淺 巖
濱野 正男 山縣 一雄 逸見 眞雄
中山 隆三 山崎 和一 安田 正介
田口 一郎 磯野 計藏 足立源一郎
山内 豊中 福田嘉四郎 茨木猪之吉
小森宮章正 額田 敏 小島 久太
黒田 孝雄 横 有恒 谷口 現吉
外山 義夫 濱口 祐三 中司 文夫
林 俊介 渡邊 漸 柳下作四郎
井形 健一 高頭仁兵衛 木村 鐵吉
今井田研二郎 伊東虎夫 田邊 主計
内田 勇三 渡邊 八郎 塚本 繁松
角田 吉夫 高橋文太郎 田口 二郎
松方 三郎 三田 幸夫 石原 巖

代表者變更

東京市神田區駿河臺町三ノ九
中央大學山岳會代表者 永井憲治
同牛込區早稲田大學體育會山岳部
代表者 中島太郎

新着圖書

登山とスキー 六月號 黎明社
ケルン 同 ケルン編輯室
山小屋 同 朋文堂
山 同 梓書房
野鳥 同 集林書房
寫眞月報 同 小西六本店
山岳講座 第七 共立社
地學雜誌 五、六月號東京地學協會
冠松次郎著 登山案内(北アルプス)
積雪期漢字山登山記京城大學登山隊
The Geographical Journal May 1936
Harvard Mountaineering Jun. 1936
Ladies' Alpine Club 1936
The American Alpine Journal 1936
Natural History May 1936
La Montagne Mars/Avril 1936
Sierra Club Bulletin Feb. 1936
Appalachia May/Jun. 1936
Trail and Timberline May 1936
The Mountaineer May/Jun. 1936
The Prairie Club Bulletin May/Jun. 1936
The Prairie Club Year Book 1936
Rivista Mensile del C. A. I. Apr.

1936

Planiski Vestnik Stev. 5 L. 1936
Svenska Turistföreningens Årsskrift 1935

Die Alpen Mai 1936

De Bergids Mei 1936

Butletti Blub Alpi Catala Abr.

1936

Bulletin du Club Alpin Tehocoso-

ovaque Mai/Juin 1936

Unione Ligue Eursionisti Marzo

/Aprile 1936

Mexico Sierra Club Num. 4/Num.

7 1935

Cumbre Abril 1936/Unio Excursio-

nista de Catalunya Maig 1936

Centre Excursionista Aliga Mar./

Mai. 1936

購入圖書

C. Brunning: -Rock Climbing & Mountaineering

McTear's Handbook for Japan 1903

F. Burnaby: -The High Alps in Winter 1883

Dorothy Filley: -Climbing Days

1935

Sir Norman Watson & E. J. King

: -Round Mystery Mountain 193

Sir Francis Younghusband:

Everst: The Challenge 1936

ヒマラヤ關係

圖書特別展觀

七月末日まで延長

關西支部ルームにおいて去る六月一日から會員藤木九三氏藏書の一部ヒマラヤ關係の圖書數十冊を借受け書架に備へ、來室者の閱讀に供してゐますが、利用者多く好評なので、七月三十一日まで會期を延長することにしました。希望者は別項開室時間に來室の上、係員に申出て下さい

ヒマラヤ文獻解説

六月十九日夕六時半から關西支部ルームにおいて、目下展觀中の會員藤木九三氏藏書の一部につき、會員宮崎武文氏より著名の圖書につき詳細なる説明があり、終つて榎谷、藤木、三木氏等を中心に稀觀の書を親しく手にとりつゝ、山の巨人が残した歴史的な足跡を辿つて、思ひを遠く雲上八千メートルの彼方にはせ折からの暑熱を忘れた。來會社多數で室外にあふれる盛況であつた。

關西支部事務所開室日

本會關西支部事務所兼集會室は日曜、祭日ならびに月曜日のほか毎日午後五時から八時まで開いてゐます場所は大阪市北區堂ビル筋向ひの大阪貯蓄銀行ビルの三階で、入口は銀行北側にあり、點燈後は北西隅の非

常階段より二階へ通つておはいり下さい。

なほ前記開室時以外の日時において、支部事務に支障のない限り、山岳團體の小集會などに同室をお貸しいたしますから、利用御希望の方は一週間以前に支部あて御照會下さい。収容力は二十名まであります。

立教大學ヒマラヤ遠征

後援

立大隊のヒマラヤ遠征後援方につき會員各位からの御希望もあり、鳥山、飯塚、松方三名を委員として、會員からの後援資金取纏めることに決定、その旨會員へ御通知しました所、時日切迫にも拘らず二十九日現在で約參百圓の合力申出でに接しました。

尙茨木理事から水彩色紙二十五枚の寄贈があり、會員から希望者を募りました所、此の方は凡そ五十口の申込がありました。抽籤の結果は夫々御通知しますが、此の方での金額並に本會からの寄附をも併せて、結核總額は六百圓を超過することになりました。最後の決算報告は次號會報で致しますが取敢へず右暫定的の報告として記録しておきます。

尙六月廿九日迄に寄附を申出でられた會員は左の如くであります。
山内豊中、吉田 竹志、飯塚篤之助、松方三郎、住澤梅太郎、磯野 計藏、田邊主計、山中正之助、石田竹太郎、桑田英次、小島 久太、木村 鏡吉

櫻井信雄、神谷 恭、横有 恒、冠松次郎、鳥山 悌成、角山 吉夫、東京慈惠會醫科大學山岳部並山の會、慶應義塾體育會山岳部

以上二十名金貳百九拾貳圓也

山岳畫協會展

會場・期日變更

會期 七月十三日より十七日
會場 日本橋高島屋七階サロン

○事務所から○

- 住所の變更は御通知下さい。
- 會費お拂ひ込み未済の方はなるべく早く願ひます。
- 會員通信は事務室内會報掛宛に願ひます

會報投稿規定

◇原稿は山岳に關する研究、隨筆、紀行、消息の類に限りります。

◇原稿締切 毎月五日

◇原稿用紙は十六字詰のこと
用紙御希望の方には會から御送りします。

◇原稿は特に御希望なき限り一切返却致しません。

◇原稿の取捨は會報編輯係に御委せ下さい。その他編輯上の一切の事項は編輯係が全責任を負ひます。

昭和十一年六月廿六日印刷
昭和十一年六月廿六日發行

發行者 松方三郎

編輯兼印刷者 逸見眞雄

印刷所 小石川區戸崎町一三

東京市芝區琴平町一(不二屋ビル)

發行所 日本山岳會

電話・芝一六四九番

廣告一手取扱 進恒

電話・四六五五番



山とスキーの月刊雑誌
一部二十五錢・年三圓

編輯は一に向上と前進を望む同好者を目標に、常に経験に富んだ登山家のルツクのやうに精選された内容をもつて張りきつてゐる。餘剩部数を刷らないから書店か發行所(大阪市北區堂島上通一丁目大阪貯蓄ビル・ケルン編輯室・振替大阪一七〇七五番)へ申込んでおかぬと手に入らぬことがあるかも知れない。